

キェルケゴールのアンチ哲学

榊沢 貴司

1

キェルケゴールのキリスト教に関する哲学的分析、人間に関する哲学的分析には非常に面白いものがあると思う。しかし、私にとって一番魅力的であるのは、そうした哲学的な分析よりもむしろ、哲学を批判し、否定するような「アンチ哲学」とも呼べる側面である。

哲学史の中では、先人の哲学の批判を通じて、自分の哲学を立ち上げることが繰り返して行われてきた。アリストテレスにしても、カントにしても、ヘーゲルにしても、ハイデガーにしてもそうであろう。キェルケゴールの哲学批判からも、もちろん、「実存哲学」というような新しい「哲学」が生まれたわけだが、しかし、キェルケゴールの思想は、そうした新しい哲学の立ち上げという枠組みに収めることができるようなものではないように思われる。もっと根本的に「哲学」という活動自体を批判しているように思われる。私自身が興味を惹かれるのはそうした部分である。

キェルケゴールはその著作の中で何度も、当時の哲学の最大勢力、ヘーゲル哲学、思弁哲学をターゲットとして哲学批判を行っている。そして、その批判のポイントは、思弁哲学の無関心的で客観的な思惟である。実存、主体性に無関心な、情熱を持たない思惟へと批判の矛先は向けられたのである。しかし、この無関心的で、客観的な思惟は、そもそも哲学が学として成立するための必要条件であるとも言える。哲学の研究は普通、無関心的で客観的な思惟、思考によって遂行されるのである。その意味では、キェルケゴールは、単に思弁哲学を批判したということにとどまらないのであり、哲学一般、現在私たちが行っている哲学的な活動、哲学的な研究に対する批判を行ったと考えられるのである。

ただし、キェルケゴールのこのアンチ哲学の姿勢は、彼が語っていることの

うちに示されているだけでなく、ある意味ではそれよりも具体的、具象的な仕方、その特異な著述形式、著述スタイルにおいてあらわされていると言える。複数の仮名を用いた著作、アイロニーやユーモア、冗談、風刺の多用、それらをも含めて彼自身の言う「間接伝達」という方法によって、キェルケゴールは、自分の著作が他の哲学書とは違うことを示していたと考えられる。その著作の中身を要約して、整理して、容易に哲学史の中に位置づけられるものではないことを示していたように思われるのである。

2

キェルケゴールの著述方法である間接伝達について少し述べておきたいと思う。キェルケゴールを解釈するうえで間接伝達をどう理解するか、ということは大きな問題である。ただ、それをこれまでの研究者は、言うほど真剣に受け取ってこなかったのではないか、という気がしている。そのように考えるきっかけになったのは、ジェイムズ・コナントという研究者のちょっと変わった間接伝達解釈であった。ジェイムズ・コナントの解釈を簡単に紹介しておきたいと思う*1。

『哲学的断片への結びの学問外れな後書』（以下『後書』）には、「結論」の後に「付録 読者との了解」という箇所がある。そこで、『後書』の仮名著者ヨハネス・クリマクスは、自分は「何の意見も持っていない」と言い、それまで論じてきたことが「意見」ではないと言う。彼は、この本を引き合いに出さないでくれと言って、この本を「撤回」と言うのである。

でこの本は余計なものなのだ。だからまた誰もこの本を引合いに出すよう

*1 ジェイムズ・コナント (James Conant) がキェルケゴールの間接伝達について論じている主な論文は以下の三つである。'Must We Show What We Cannot Say?', in R. Fleming and M. Payne (eds), *The Sense of Stanley Cavell* (Lewisbury: Bucknell University Press, 1989). 'Kierkegaard, Wittgenstein and Nonsense', in T. Cohen, P. Guyer and H. Putnam (eds), *Pursuits of Reason* (Lubbock: Texas Tech University Press, 1993). 'Putting Two and Two Together: Kierkegaard, Wittgenstein and the Point of View for Their Work as Authors', in T. Tessin and M. von der Ruhr (eds), *Philosophy and the Grammar of Religious Belief* (New York: St. Martins Press, 1996).

な面倒をしないでほしい。というのは、この本を引合いに出す人は、正しくその事によってこの本を誤解しているのだから。…就中、吼え叫ぶ党派人がこの本を称賛しつつ引用し、そして私をば人名録の中へ記入するといったあらゆる称揚の暴行からして、天よ、この本と私とを守り給え。…なぜなら、私は、キリスト者に成るという事が最も困難な事であればならない、という意見以外の何の意見も持っていないからであるが、この意見は何ら意見というべきものではなく、また、「意見」に対して普通に特徴となっている性格は何も持ってもいないからである。…人はカトリックの諸書、殊に古い時代の書物の中に、全ての事が神聖な普遍的な母なる教会の教えと合致して理解さるべきであるという事について読者に知らせるところの一つの注意をば、本の最後部に見出す如く、それと同じように、私の書くものは、それが撤回されるような風に、つまり、その本が結論ばかりではなくおまけに撤回をも持っているような風に、全てが理解さるべきだという知らせをば、同時に含んでいるのである。(全集第7巻424-5頁 / SKS7, 561-2) *2

最後の最後になって、これまで述べてきたことを「撤回する」と言うわけである。ジェイムズ・コナントは、この撤回を単なる冗談とは見なせずに、それをそのまま受け取ろうとする。『後書』は、撤回されるべき内容を持つ著作であると理解するのである。

どういうことか、と言うと、コナントは、『後書』はそもそも「思弁哲学のパロディー」として書かれたものであると考えるのである。仮名著者ヨハネス・クリマクスは、『後書』で、自らの前著『哲学的断片』(以下『断片』)に関して、それは「思弁哲学のパロディー」(全集では「思弁への全面的揶揄」)であった

*2 キェルケゴールの著作からの引用は、大谷長監修『原典訳記念版 キェルケゴール著作全集』(創言社)、飯島宗亨編『キェルケゴール講話・遺稿集』(新地書房)、Søren Kierkegaard Forskningscenteret のデンマーク語著作集電子版 *Søren Kierkegaards Skrifter, elektronisk version 1.8* (<http://sks.dk/forside/indhold.asp>) による。引用箇所は本文中に、それぞれ「全集」「遺稿集」「SKS」と略記した上で、巻数、頁数を記した。なお、翻訳のあるテキストについても、デンマーク語著作集を参照し、一部訳を変更している。

と述べている（全集第6巻595頁 / SKS7, 249）。コナントは、『断片』について言われた「思弁哲学のパロディー」というのが、『後書』にも当てはまると考え、『後書』で語られてきたこと自体が、単なるパロディー、冗談であると解するのである。

もう少し説明するならば、思弁哲学には、思弁を進めていくうちに、いつの間にか自分でも気づかずに、無意味なことを語り始めてしまうという性質がある、とコナント、そしておそらくはキェルケゴールも考えている。思弁哲学のこの愚かな姿を模して、『後書』も最終的に無意味な主張を行っている。それゆえに、クリマクスは、最後にこの本を撤回しているのだと解釈するのである。（ちなみに、コナントの考える『後書』の無意味な主張というのは、悟性がキリスト教の逆説と他の逆説、他の背理とを区別するということである。また、コナントの論文の主題は、キェルケゴールの『後書』とウイトゲンシュタインの『論理哲学論考』を対照することであり、この二冊が同じような構造を持っているということを主張している。『論理哲学論考』の最後にある「梯子を投げ捨てる」は、この『後書』最後の「撤回」と同じ役割を果たすものと考えるのである。）

『後書』はこうして、無意味を語っていると見なされるのだが、しかし、クリマクス自身は、この撤回に関して、「書物を書いて撤回すること」とは「書物を書かないこと」とは違うとも述べている。

彼〔空想上の読者〕は書物を書いてそれを撤回するという事が書物を書く事をやらないという事とは別の事だという事、また、誰かに対して意義を要求しないような書物を書くという事は、それを書かないままにして置くという事とは別の事だという事を、理解する事が出来る。（全集第7巻428頁 / SKS7, 563 [] 内は引用者）

この発言に基づき、コナントはキェルケゴールの間接伝達を次のように解釈する。

直接伝達は何かを語る。伝達でないもの（noncommunication）は何も語

らない。間接伝達は、伝達であるように見えるものが実際には伝達ではないことを示そうとする。^{*3}

『後書』の中に書かれていることは、何か重要なことを伝達しているように見えて、実は無意味なことを語っているのであり、「撤回」によっては、伝達であるように見える『後書』が、実際は、何ら伝達ではないことが示されている、と解釈されるのである。

これまで多くの研究者は、間接伝達をせいぜい「遠まわしに言うこと」としてしか理解してこなかったように思われる。キェルケゴールの間接伝達は、少し手を加えれば直接伝達に変換できるものと見なされ、研究者は、間接伝達についてちょっとした解説を行えば、その思想をすぐさま要約することができたのである。これに対して、コナントは、間接伝達をただ間接的にのみ可能な伝達として、直接伝達とは根本的に異なる形式の伝達として理解しようとする。それは、「直接伝達」でも、「伝達でないもの」でもない、特異な伝達として理解されるのである。

いろいろな研究者が批判しているように、コナントの解釈には問題がある部分もあると言える。しかし、その解釈は、根本的なところでは、非常にキェルケゴールの意に即したキェルケゴール的な解釈であるように、私には思われる^{*4}。とりわけ、間接伝達を直接伝達に簡単に変換できないような伝達として、理解しているという点においてである。実際、遺稿の『倫理的伝達の、また倫理—宗教的伝達の弁証法』の中では、知識の伝達としての「直接伝達」と、能力、技能の伝達としての「間接伝達」がまったく異なるものとして説明されている。

[倫理的伝達に関して] 対象は消え去る。なぜなら、すべての人がそれを既に知っているのだから、ここにおいては、伝達さるべき対象はないことになる——こうして、倫理的なものを伝達しようと試みることは、まさ

^{*3} James Conant, 'Must We Show What We Cannot Say?', p. 262.

^{*4} コナントの解釈については、その問題点も含めて以前により詳細に論じている。現在考えていることとまったく同じというわけではないが、参照されたい。柳沢貴司「パロディとしての『後書』」、『人間存在論』第9号（2003年）、265-276頁。

に、非-倫理的なことである。(遺稿集第8巻192-193頁 / SKS27, 395 Papir 365:8 [] 内は引用者)

現代の根本的な混乱は、単に、能力の伝達と言われるものがあるということのを忘れ去ってしまっただけでなく、不適切にも、能力を、そしてまた、当為-能力の伝達を、知識の伝達へと変質させてしまったことである。実存的なものが消えてしまった。(遺稿集第8巻227頁 / SKS27, 414 Papir 368:14)

「間接伝達」(倫理的伝達)では、直接的に伝達される対象は、存在しない、と言われる。倫理的なものは、誰もが知っているので、知識の伝達は不要なのである。そして、「倫理-宗教的伝達」については、ごくわずかな知識が伝達されなければならないが、しかし、基本は間接伝達であるとされる。キェルケゴールの著作も、「間接伝達」であるということからするならば、そこで伝達されねばならない知識、対象は基本的に存在しない、ということになる。多くのことが語られているとしても、直接伝達に変換できるような内容は存在しないということになるのである。

3

キェルケゴールの著作活動における最大の関心事は、「キリスト者に成る」という問題であったとされる。これは、広い意味で言うならば、人の生き方の問題である。キェルケゴールの思想は、直接伝達の形式で行われている現在の哲学が生き方の問題に関して役立つこと、生き方に関して、何も与えることができないことを示していると言える。もっと言うならば、哲学の抽象的反省は、人を実存、主体性に無関心にさせようという意味で、有害でありうることを示していると思われる。

もちろん、このような見解は、現在行われているような哲学の活動、つまり、大学で哲学の講義をし、哲学論文を発表するというようなことに対する強力なアンチテーゼであると言える。実際、キェルケゴールの文章の中には、大学講師や教授に対する皮肉や嫌味が散見される。

ありがたいことだ。私が死んだら、ここには大学講師には意味あることがあるだろう。この下劣な悪党ども！しかし、それは何の役にも立たない、役に立たない。それが印刷され、繰り返し読まれるとしても。講師はそれでも私からもうけを得て、講義して、おそらくこう付け加えるだろう。「これの特異なところは、それを講義できないということなのだ」と。(SKS25, 347 NB29:87)

自分の立場を考えると矛盾していることにもなるわけだが、このキェルケゴールのアンチ哲学的な姿勢に、私は少なからず共感せざるをえない。私にとってのキェルケゴールの魅力の一つ挙げるならば、やはりこうした点にあると思われるのである。

4

以上がシンポジウム「キェルケゴールの魅力」での発表内容であるが、発表後、何人かの方から、「アンチ哲学」と言ってもその「哲学」で何を意味しているのかをもう少し明らかにする必要があるのではないのか、というようなご意見をいただいた。この点を含めて、発表後に考えたことを少し追加しておきたいと思う。

ここで「アンチ哲学」と言うときに、そのターゲットとなっている「哲学」というのは、基本的には、論文を書いたり、学会発表したりするような仕方で現在普通に行われているスタイルの哲学研究であり、あるいはまた、大学での哲学講義である。しかし、もう少し踏み込んで言うならば、それは論理的、客観的な議論をその成立要件とするような哲学研究であり、哲学講義であると言える。

アリス・クレリーは、文学と倫理学の関係に関する最近の論争を要約して、道徳哲学者の中には二つの対立的立場があると述べている^{*5}。道徳哲学を狭い

^{*5} Alice Crary, 'Literature and Ethics', in H. LaFollette (eds), *The International Encyclopedia of Ethics* (Wiley-Blackwell, 2013). 'J.M. Coetzee, Moral Thinker', in A. Leist and P. Singer (eds), *Coetzee and Ethics: Philosophical Perspectives on Literature* (New York: Columbia University Press, 2010).

合理性概念を前提して理解する立場と、より広い合理性概念を前提して理解する立場の二つである。前者の考えでは、「合理的な言説」とは、議論であり、議論とは、すなわち、ある言明からある言明へと推論によって進んでいくものであり、その際、何か人の感情を引きつけることには頼らないで、進んでいくものである。その限り文学作品はその中には含まれない。大多数の道徳哲学者はこの立場であるとされるのである。それに対して、一部の道徳哲学者は、「合理的な言説」をもっと広く捉える。彼らは、道徳に関する合理的理解に達するには、ある種の感受性を持つことが必要不可欠であると考え、それゆえまたある種の感受性を養うような言説もまた「合理的な言説」であると考え。読者の感情を引きつけ、感受性をはぐくむ一部の文学作品もまた、読者の道徳理解に寄与する「合理的な言説」であると理解されるのである。議論以外の言説もまた「合理的な言説」でありうるという意味で、より広い合理性概念が採用されているのである*⁶。

これまでのキェルケゴール研究は、他の哲学者、倫理学者を研究する場合と同様に、もっぱら狭い合理性概念を前提する立場から行われてきたと言える。キェルケゴールの著作から文学的な技巧、工夫をはぎ取って、論理的な議論へと再構成して提示しようとしてきたのである。けれども、それは本当に正しいやり方なのだろうか。キェルケゴールがある目的をもって仮名著者を設定し、アイロニー、ユーモア、比喩、風刺といった様々な文学的技巧を駆使していたことを考えるならば、彼の著作は、論理的な議論へと再構成する仕方ではなく、むしろ、広い合理性概念を前提する仕方で解釈する必要があるように思われるのである。

仮名著者ヨハネス・クリマクスは、『後書』の中で、前著『断片』の書評がドイツの雑誌に掲載されたことに触れて、その書評に関して次のようにコメントしている。

*⁶ クレリーは、この立場に立つ代表的な哲学者として、スタンリー・カヴェル、コーラ・ダイヤモンド、アイリス・マードック、マーサ・ヌスパウムといった哲学者たちの名前を挙げている。

彼の概評は正確で、全体として弁証法的に頼りうる。だが要点はこうなのだ。概評は正しいにも拘らず、それを単に読む者は皆、この本について全く転倒した印象を得ることになる。…概評は講義風であり、純粹に且つ端的に講義風である。だから、読者は、その本もまた講義風のものだという印象を得るだろう。これは何と言っても私の眼には、その本について得られる限りの最も転倒した印象である。形式の対立、実験と内容との挑戦的な対立、詩的な大胆さ（キリスト教をすら詩化するところの）、前進つまり所謂思弁的構成よりも前進するためになされる唯一の試み、アイロニーの疲れを知らぬ絶えざる活動、著作の計画全体に伴われた思弁哲学のパロディー、…これら全ての事については概評の読者は夢にも示唆されない。（全集第6巻595-6頁 / SKS7, 249n.）

これは、先に言及した「思弁哲学のパロディー」ということを述べている箇所であるが、ここでは、文学的技巧をはぎ取ってしまった概評は、「最も転倒した印象」を与えられている。もちろん、これは仮名著者ヨハネス・クリマクスによる、『断片』という一仮名著作についての発言にすぎない。とは言え、やはり、キェルケゴール自身も同じような見解を抱いていたのではないかと考えざるをえないだろう。おそらくは、キェルケゴール自身も、文学的技巧をも含めてその著作を理解すべきであると考えていたと思われるのである。

キェルケゴールは、こうして「広い合理性概念」を有する哲学者たちの一員として位置付けられるように思われる。もちろん、彼はそうした見解をその著作の中で、自らの意見として直接に主張するわけではない。せいぜい上の引用でのように、暗示するにすぎない。彼は、むしろ、自らの著作でその見解を実践しようとするのであり、多彩な文学的技巧を駆使して実際に読者の感受性を涵養することを目指していたと考えられるのである。しかも、彼は、自らの著作が「狭い合理性概念」を前提する哲学に取り込まれ、変容されてしまう危険性に深く自覚的であったと言える。それゆえに、その著作には、哲学研究や哲学講義に取り込まれることに抵抗するような工夫、策略が幾重にも施されることになる。『後書』での「撤回」もその一つであると解釈することができるだ

ろう。キェルケゴールの著作は、哲学研究や哲学講義に対して抵抗し、反発し、敵対するような特色を有することになるのである。本稿でのキェルケゴールの「アンチ哲学」というのは、こうした側面を指しているのである。